平成 28 年 8 月 23 日

「大学入学希望者学力評価テスト（仮称）」検討・準備グループ（第3回）議事概要

日　　時：平成２８年８月２３日(火)１０：００－１２：００
場　　所：文部科学省　３Ｆ２特別会議室
出席委員：岡本主査、荒瀬委員、沖委員、川上委員、関根委員、東島委員、
　　宮本委員、安井委員、吉田教授（オブザーバー）

【資料説明】
○橋田室長より資料１に基づき「「大学入学希望者学力評価テスト（仮称）」の検討状況について（案）」について説明
○伯井理事より別紙１に基づきセンターにおける検討体制について補足説明

【自由討議】１．記述式問題の導入
東島委員：公表すると、色々なグループから賛成・反対の意見が出ると思う。それを取りまとめる作業というのはどうするのか。
橋田室長：検討状況を公表して、それぞれの関係団体とも個別に相談しないといけない。それぞれの団体の意見集約のスタイルがあると思うので、団体の特性に応じながら対応したい。併せて、世の中的にも色々な意見が出てくると思うので、そういったものも見定めながら意見集約にあたりたい。また、それを踏まえて、検討・準備グループの資料を９月以降用意したい。記述式の実施方法の時期に関することは、年内には決めないといけないと思うので、そういったピッチで作業を進めていきたい。
沖 委 員：この記述の問題の前提として、私立大学でセンター試験をどのように使っているのかのイメージを共有したい。大きく３パターンあり、①５教科ないし、５～７科目をフルに受験して、その点数のみで合否判定を行う。合格者発表が、だいたい 2 月 10 日前後というパターン。これは、文系であれ、理系であれ、もし記述式が国語と数学で入ると、相当の人数の受験者、今調べている最中だが、定員の 20～40 倍くらいが出願している。見た目だと数十名しか定員を作っていないが、実際の受験者が 1000 人単位いる。裏側に問題があって、歩留りが非常に悪いというのもあるが、いずれにしても、２日前後ですべての処理をしなければならない。現在の５教科ないし、５～７科目のセンター試験のみでの合否判定は、私立大学では相当困難になる。国立大学のイメージで、二次試験の前に採点が終わっていればいいという話では

なく、１月の中旬からデータ処理されたものを使って、２月上旬に終わるので、よほどスケジュール変更がないと現行の仕組みは維持できない。もちろん、維持すべきかという議論がもっと前にあるが。それについては柔軟に考えられるが、まず、相当大きな影響が出る。②３教科ないし３科目、ないし４科目型。ようするに、文系だと国語と英語と何か。理系だと、英語と数学と理科というパターン。理系は数学の記述について、文系だと国語のみ影響を受ける。実際どのように使うかで論点があるかと思う。最後に、③１科目を受験して、二次試験ないし、ＡＯ・推薦のパターン。選択科目に国語と数学を入れなければよいので、あまり影響受けない可能性もある。いずれにしても、この３つのパターンの中で、特に深刻な影響を受けるのは、フルパッケージで受験し、しかも合否判定が早いと影響受けるというのをぜひご議論いただきたい。パターン①のことだが。その上で、技術的な話として、今回の資料公表には出せないと思うが、継続して議論してほしいことが４点ある。①アラカルト方式と呼ばれているもので、私立大学では有効に活用してきているという流れがある。アラカルト方式が維持されるのかというのは、相当決定的な話になると思う。哲学の話になると思うので、この点はどこかで確認をさせていただければと思う。②先ほど申し上げた３つのパターンについて、①は案３、案１では維持が相当困難ということ。社会として、どう受け止めるのか。私立で、そういうやり方はやめましょうとなるのかもしれないが、この点は相当大きい。ようするに受験の機会の減少になるし、私立大学の考え方の転換になると思う。③片峰先生の資料（論点整理）でも書かれていたが、記述の問題が増えるのかというのは相当大きな問題。今までは 40 文字 1 問で議論していたが、国大協の提案では、もっと多様な記述を出して、採点を４０日程度で行うように思えるので、そうするとおそらく、何十倍もの受験生の答案を全てチェックするのは現実的に厳しいと思うので、記述式の問題の利用をするとかしないとかの決定を、私立大学がアドミッション・ポリシーによって決めていいのかという問題を、国大協の資料では議論の論点となっている。私立でもそれは相当大きな問題。④こうした問題の前提となっているのが、点数化の問題だと思う。もともとの議論の大元を辿っていくと、段階別で示すという話があった。これはもうないと考えてよいのか。現行の 1,000 点満点とかの、点数化された中の、何点分かが記述で出されるのか。段階別で表示するのか。これもすべて、私立大学が個別で決めていいとするのか、あるいは国立大学も含めて決めていくのか。片

峰文書の中では、各大学のアドミッション・ポリシーで決めていいとある。こちらできちっと了解が取れないと、後でそんなはずではなかったとかになりかねない。

岡本主査：現状ではそうなのだが、基本的に、センター試験の実施主体は大学。共通部分をセンターがやっている。だからこそ、我々は人を出して作題をやっている。作題委員になると２年～３年の負担になるという体制であるということを確認したい。実施主体は大学にあるというのをどう有効に使うかということがあると思う。もちろん、社会的にどう見えるかは別にして。

橋田室長：ご指摘の点は今後、詳細を詰めていきたい。今回、共通テストの記述式の導入に合わせ、個別試験の改善、より解答の自由度の高い記述や小論文といったものも併せて改革会議から提案されている。共通テストの記述式の利用法をどのように位置づけていくかというのは、個別の状況も踏まえながらさらに検討したい。現行は、アラカルト方式の中で色々な使い方をされているので、その点は意見を聞きながら整理をしたい。また、成績表示についてだが、情報開示の観点含め、トータルに詰めていきたい。

角田課長：補足だが、沖先生から話が合った、1 点目と３点目は、今私大として、センターを利用してもらう前提となっている。そこは、今後もおそらく変わることはないと考えている。成績表示に関しては、システム会議においても、32 年度からはマークシートの部分は段階別は想定していないという整理。この場でご指摘いただいたことはご議論いただくべきことと思う。

荒瀬委員：この学力評価テストは、何のために考えていたかというと、高校生にどのような力をつけさせるのか、ということが検討の狙いに明記されている。どの案であれ、ある大学がアドミッション・ポリシーに基づき記述式をやらないとなれば、高校は入試に影響を受ける。どこの大学を受ける生徒が多いから、とか、どこそこ大学の受験を目指す生徒は記述式をやらなくていいとかなりかねない。一方で、高校生にどんな力をつけさせるかは、基礎学力テストとの関わりが出てくると思う。こちらだけの議論ではなく、もう１つにも反映させる必要がある。全く質の違う２つのテストの整合性をよく考えないと、後退するイメージさえ持つ。

関根委員：そもそもセンター試験を変えるというのは、なんなのかというのを世の中が分かっていない。私の個人的な理解だが、高校生の、卒業時の力を世界に示せるようなレベルを目指すべき。基本的には、高校生

の力を、今の時代に即した形で、どれだけつけているかを評価するテストだと思っている。そういった視点で見ていかないと。特に、ＣＢＴまでやれれば、このテストがアジア圏に輸出できるくらいのイメージを持って設計しないと。記述式を入れないと、世界的にはならないと思う。

岡本主査：主査ではなく、個人的な意見。それをやるためには、基礎学力テストと、大学とをどうつなぐかに立ち戻ってやらないといけないと思う。現行のセンター試験はドライにいうと、選抜試験。選抜試験は、それなりの難しさもある。

東島委員：これからの時代に生きる学生を、世界と競争してやっていけるような、広い、強い学力をもった学生を全体の教育組織の中で育てたいという願いでやっている。多くの学生を受け入れている私立大学が、アドミッション・ポリシーに基づいた、というのを隠れ蓑にして、高校教育の一部だけやればいいというメッセージを出すことを危惧している。ほとんどの学生は私学に行くわけなので、私学にそういうメッセージを共有してもらわないと日本の教育は変わらないと思う。アドミッション・ポリシーで勝手にやっていいというのは心配。

岡本主査：こういう形で公表するのはものすごい議論があると思う。関根先生の発言のように、それこそ日本の教育を世界に発信するのだ、といっていただいたりもしている。それは一案です。とにかく、こういう形で公表するのはよろしいでしょうか。いろんなとこで文言の修正があるとすれば、恐れ入りますが主査に一任してほしい。

東島委員：一ついいですか。試験だけに矮小化させたくない。各大学は入学者を選ぶときに、高校におけるすべての活動を判断する総合的選抜を日本は目指すんだと。その中の、選抜を担当するのが試験ということを常に言っておかないと。試験だけに焦点あてていると、非常に矮小化された議論になるので、前面に出してもらいたいと思う。

橋田室長：その点で補足だが、検討状況の公表の際には、共通テストだけではなく、高校教育、大学教育入学者選抜改革の全体をセットで出したいと思っている。その中で、個別選抜の新たなルール作りや、調査書の在り方などについては別途、改善協議の方で議論されている。そちらの検討状況も併せて示したい。さらに具体的な詰めのところは、実施時期などにかかわるので、お互いの情報交換を図ることになると思うが、改善協議の検討状況をにらみながら、さらに検討していただけるようにしたいと思っている。また 28 年度からの委託事業として、複数大学がコンソーシアムを組み、先進的な取組を各大学に波及しても

らうという取り組みを考えている。単に共通テストだけでなく、一体として検討している。

【自由討議】２．英語の多技能を評価する問題

吉田教授：事前に説明を伺ったうえで今日は参加しているのだが、ここにある２つの案について、問題点を話す。最終的には、検定試験として活用されているものを使っていくというアイデアはそれしかないと思う。ただ、案１の注１にある、既存の検定試験のカスタマイズだが、認定するために基準が必要なので、きちんとしたものがないといけない。一番大切なものは理念的なものなので、指導要領の理念にどれだけ合致しているかということが一番大事だと思う。カスタマイズすることで気になっていることは、既存の試験は妥当性・信頼性が検証され、点数の標準化がなされているものなので、年に数回テストを行っても、基本的に同じ点数を測っている。これをカスタマイズしたら、作り直すということになるので、新しく検証しないといけないので、はたしてそこまでの作業をどれくらいできるのかが分からないので、やはり心配。今あるものは何年もかけて検証されているので、そのまま使えればいいのだが、そのまま使えない場合の問題が大きい。そこをクリアできたら案１は問題ないと思う。案２については相当あると思う。１つは、資格・検定試験は全て世界的に認められた基準、ＣＥＦＲにそって点数が解釈されているが、センター試験はそういった基準がない。そうすると、２つ合わせるといったときに、Reading と Listening をセンターで担うといった場合に、これは何を基準に作られたものなのか。点数を合わせるといったこと自体、全くできないのではないだろうか。もう 1 つは、点数の等化の話があったが、民間の資格・検定試験は点数を等価できているが、センター試験は素点中心。点数の解釈が違うものを合わせるのは非常に大きな問題になると思う。出てきた結果をどう解釈するのか、正直私にはまったくイメージがわかない。もう 1 つ、民間の資格・検定試験があったとして、4 技能のうち２つ、speaking と Writing を持ってくるという話になった時に心配なのは、今の４技能テストは、それぞれの技能を独立して作っているわけではない。かなり統合的なスキルを活用したテストで、speaking だけを測っているテストではない。なので、切り売りできるのかという問題がある。民間のほうがちゃんとできると言ったら大丈夫かもしれないが、

４つがセットになっているので、そこのところをどう切り分けられるのか心配な点である。もう 1 点、特に案２の問題だが、民間のテストは年数回実施され、等化されているわけなので、そうした時に、speaking と Writing を年数回やっているものから切り離せるのか、それともまた別個に作るのか。別個に作るとなると、これだけはセンター試験と同じ時期に行うとなると、結局は採点が 50 万人できないということになる。そうすると、複数回受験可能なテストの一部となると、２技能だけ取り出せるのかなと思う。検定試験を使っている大学は入学選抜の基準としてという形で、ベースライン設けている。そこを越せば、あとは何点取っていても同じということをやっている。これができるのは、やはり複数回やっているから。１回だけだと、１回勝負なのでできなくなる。そうなると、受験生は全員その１回だけに集中してしまうということになる。あとは、ほかの教科が変わった場合のセンター試験がどうなるのかというのは私は分からないが、点数が高ければいいという入試の捉え方だと、この英語の試験も、受験生は３回やっていたら３回とも受けるということになる。負担が大きくなるだけ。アドミッション・ポリシーに関わってくると思うが、大学がある程度ベースラインを設けて、そこから超えたら、上の点数の差は関係ないというのをちゃんと明記しない限りは、受験生の数が減るということはないと思う。そのあたりが、テストを利用する側の問題。一般入試になればなるほど、１点差がものをいう世界になるので、そこが心配。推薦やＡＯの場合は、ある程度の枠があれば、その中に入っていれば気にしなくていいということになるのだろうけれども、上智大学は、一般入試で各学部学科が基準を越せばいいということでやっている。非常に大変だと思うが。英語だけではなく、記述式問題もデータを見ていると、国語も 50 万人受けていたりと、非常に数が多い。英語は年複数回できる体制が、民間の団体であるが、ほかの教科は今のところない。そうなった場合、本当に 50 万人いっぺんに評価するとなると、相当大変だと思う。他のテストも、本来ならば等化できて、標準化できて、安西先生が最初に仰ったような、年数回できるような体制を取らないとすごく難しいのかなと思う。もう 1 つ、各大学のほうで、国立大学で採点をするということだが、私立大学では、どこかの大学の先生が採点したものを私立大学も使うのか、それとも私立大学が採点するのか。その辺のことをきちんと決めておかないと、この点数はどこの大学でも使えるという体制にしないと、ますます

負担が大学にも教員にも増えると思う。いずれにしても、カスタマイズするといった場合に、民間の業者が、今あるテストをどこまで使えるか。それによって複数回受験可能になるかならないかがすごく影響される。影響され、複数回受験できなくなると採点の手間がすごく大変になる。もう１点いうと、案２の中で、複数の試験が対象となるのか、１つだけ決めるのか。同じＣＥＦＲのＢ１といっても、業者によってＢ１は違う。換算表は固定していないので、毎年少しずつ変動している。そうした時に、複数のテストどれでもいいということになると、一番やさしいところに集中し、そこが負担を全部かぶってしまうということになりかねない。センター２技能、資格・検定試験２技能だと、受験生はこの組み合わせが一番多くなると思う。民間は４技能テストを開発しているが、そのうち２つしか使ってもらえないというのはいいのかなと思う。４技能を受験してもらって、そのうちの２つを使うのならまだわかるが、２技能だけを取り出してとなると、影響が大きいと思う。そのあたりをどう整理していくか。最後にもう一度言うが、最初に申し上げたが、センターで、ＣＥＦＲの基準を設けて、この問題はＢ１だとか、そういった基準に沿った評価ができるようにするならば、今センター試験を作るのに、数年ごとに作題委員が変わっていくので、絶対的基準が作れるのかが心配。もしやるのならば、センターの中に、英語の専門家を採用し、基準に沿ったものを維持するようにするべき。

岡本主査：質問したいのだが、当面は併せてやるとしているが、これが書きすぎということか。

吉田教授：意外とこの案２は難しいと思う。この方がセンターは負担が大きいと思う。基準を設ける方が、大事だと思う。そっちの方に力入れた方がいいと思う。

岡本主査：別紙７では、案１が目標だが、当分は案２だ、と言っているのは問題あるという意見があろう。

橋田室長：案１がすぐやれるといいと思うが、４技能の認定型のスキームで、初めてのことではあるが、様々なリスクを視野に入れる必要がある。認定基準に合致するところがなかなか出てこなかったり、撤退してしまったりということも念頭に置きながら、経過的措置ということでの案２という観点で、ご議論いただいていた。吉田先生ご指摘の点について、１点の既存のセンター試験の見直しは、センターの方でも関心を持っているので、連携しながら検討したい。もう１つの方だが、これから認定基準を検討しなければならないと思う。すでに、民間の試験

団体との意見交換も内々に進めているが、今回の公表資料を基に、民間のほうでどこまでできるのかという視点、大学のニーズの視点、有識者の視点を踏まえながら、認定基準の在り方を検討したい。

伯井理事：カスタマイズの意味は、試験の内容もさることながら、共通テストとリンクさせるために、試験の実施体制や監督体制などを見直してもらわないと認定ができないのではないかということではないかと、この資料では思われる。全面的カスタマイズという意味では、おそらく作っているのではないだろうかと思われる。この資料だけでは見えない部分もたくさんある。成績提供システムに、４技能をどのように入れていけるかという制度設計もやっていかないと見えてこないと思うので、センターとしてもしっかりやっていきたい。私の理解では、１社ではなく、複数の技能検定がないと、リスクが大きすぎると思う。現行のセンター試験のテスト結果表示と、民間の結果表示を単純に足して合わせるのは不可能なので、大学にニーズを見極めながらどう考えていくのかがポイントになると思うので、今後議論したい。一方、案１がはたして、各大学関係者や高校関係者の理解が得られるかについてもご不安なのだろうと思うが、その辺もご議論していただければと思う。ＣＥＦＲとの基準については今後、英語についての検討部会を９月以降立ち上げるので、検討していきたいと思う。

義本審議官：認定を考えた場合、実施体制・料金・実施会場の確保・セキュリティーを含め考えたい。中身はそれぞれあるので、高校で実際使っているところもあるので、１社に限定するのは難しいと思う。複数回受験は、選抜というより、資格試験に近いため、各大学での利用のしかたのルール作りについて、さらに検討したい。

岡本主査：別紙７について、一行目の黄色の枠内の文言について、案２でやるように見えるので、「案２で検討する」のように変えるべき。

吉田教授：民間を使った場合の会場の問題は、案１も案２も同じだと思う。それぞれの試験団体が実施できるといっている場所を使うわけでしかない。

荒瀬委員：別紙７で、「セーフティネットも考慮して」とあるが、これでは民間の試験を使うことが危険なのかと言われかねない。表現を丁寧にしてほしい。

安井委員：民間の資格・検定試験はばらばらなので、どこかでレギュレーションをするということでセンターが出てきたと思う。センターの役割を明示する議論をした方がいいと思う。

【自由討議】３．マークシート式問題の改善
４．結果の表示
５．複数回実施・ＣＢＴの導入
６．プレテスト

沖 委 員：「３．」の後半の部分、科目の簡素化について確認したい。中教審の議論で、新しい学習指導要領で科目のイメージが公開されているが、地歴公民は、地理総合や歴史総合が必履修科目に数年後になる前提でこの世界史ＡとＢとかの科目を、短いスパンで変わる可能性があるが、改革するということを考えているのか。

橋田室長：今は 32 年度について議論しているが、36 年度以降の科目構成も見据えながら、学習指導要領の議論や高校大学のニーズも見極めつつ総合的に判断して整理したい。

関根委員：「４．結果の表示」のマークシート式問題について疑問がある。このテストは共通の部分を作っていくということで、マークシートでよりきめ細かい評価情報の提供というのは素点ではないか。結局、青天井となる。資格試験的なものになってきてしまっているのに、何でこんなことになってしまっているんだ。これは大学の都合だと思う。今回のテストは、大学の都合をあまり言ってしまっては、高校教育はよくならない。センターの試験で高得点を取るのはものすごい努力が必要なのに、無駄。そんなことをやらないで、もっと必要な努力をしなくてはいけない時期に来ているのに、よりきめ細かい評価の情報を提供するというのは、項目別にというのはわかるが、素点的に出すのはいかがなものか。

橋田室長：改革会議の最終報告を踏まえ、より詳細に検討しているところではあるが、単に素点的なのもではなくて、領域ごとの解答数や、大学のアドミッション・ポリシーに応じて、参考になる情報を提供したい。そういった趣旨で整理している。先ほどの関根委員のご指摘も配慮しながら検討を進めたい。

岡本主査：何回かやるということだが、何点以上ならオッケーという試験であれば、いいわけで、要するにＡをとればいいという試験なら、１回でＡを取ればそれで終わりだが、それでは選抜試験と言えなくなる。資格試験とか達成度試験とのちがいだ。「５．複数回実施」に関係するが、ドライに選抜試験と割り切って複数回にするととんでもないことになる。１点刻みになってしまう。７５点以上取ってればいいんです、別のところで頑張りましょうとしないと性格が変わってしまう。選抜

試験ということに関わってくる。荒瀬委員ご指摘のように、基礎テストのように、達成度のような基礎学力を上げていこうというのがどんどんうまく回っていけば、カバーできてしまう。そうすれば、ある意味、共通テストは選抜試験という考えの上でやるべき。

関根委員：私は、共通テストは選抜でないと思っている。資格試験的になるべき。個別試験で各大学が自由にやるべき。両方の意味を持ってくるというのは、非常に意味がある。今回の改革で言うと、もともと段階別ということがあった。細かな点数とならないようにということで始まっていたと思う。Ａができればいいよとかにしていくべき。だから複数回ができる。でないと１回でやるべき。なぜ複数回を出したかを考えると、段階別で出していく。段階だったならば、うちはＢでいいですよと。そういう風に使っていただかないと、昔のセンター試験に、単に記述式を入れただけになってしまう。そこはかなり大きいなと思う。

岡本主査：同じことを言っているので、突き詰めていけば、性格が変わってくるのだろうなと。個人的意見だが、選抜でなくなると、基礎学力テストに近くなる。今の選抜の形式で、複数回やったら、良いことはないと言いたい。

荒瀬委員：そこの整理は大事で、採点方法の３番目は成り立つのか。便宜上採点はそうしていただけるとありがたいとなってしまうのは。資格試験なのに大学の先生が採点するというのは。

岡本主査：今は、選抜試験。

荒瀬委員：そこをきちっと整理しないと。どういう試験かを明確にしないと。

橋田室長：現在の検討は、まず 32 年度を目指してどういう制度設計ができるかを議論している。その上で、「５．複数回実施・ＣＢＴの導入」は最終報告の内容を踏まえながら、引き続きの検討となっている。複数回実施などは、課題を整理している。今回の検討のメインは 32 年度という観点で整理いただければと思う。

岡本主査：出題は共通、採点は個別というのは、選抜試験としてはいいかもしれない。

安井委員：「３．マークシート式問題の改善」の科目の簡素化の、外国語の取り扱いについては、全く異質なものを、どういう風に検討するのかというところだと思う。これからの多言語・多文化の国際社会を見据えると、１科目「英語」とすると、これからの将来の子供たちが、どのような言語・文化を理解するかに影響が出ると思う。多様性ということが言われているので、この書き方だけは、上の３つに比べ、異質に思

える。この取り扱いを考えてほしい。

橋田室長：英語４技能の認定スキームということで、議論が進んでいるが、仮に英語４技能を使っていく中で、センターに２技能残すとなると、ドイツ語、フランス語、中国語、韓国語の取り扱いは併せて考えていかないといけない。現行、英語は、センターは２技能でやっているが、英語以外は１技能でやっている。リスニングをやっていない中で、４技能となると、現状とのかい離が進む。全体状況も踏まえながら、科目の構成を検討させてもらいたい。少し、他の３つとは異なる形で整理させてもらっているが、今後さらに詰めていきたいという意味で、論点として残しておきたい。

安井委員：残してもいいが、公表してみた人が、これからの多言語・多文化という国際社会の中でどうやって評価テストを通して、関根先生が先ほど仰ったように、世界に打ち出していくときの、ストラテジーとして、こういったようなことを検討するということをもう少しアグレッシブに書いてもらいたい。

岡本主査：英語以外で第二外国語を履修させている高校はたくさんある。私学は積極的にとりたいという使い方もある。個人的にはそっちの方がいいと思う。

安井委員：これを切ると、高校はこういう科目を抑えると思う。

東島委員：阪大では、２５の言語を取扱っていた。いくつかの言語をピックアップする理由はない。共通語は英語なので、共通語として英語とするのは良いと思う。

安井委員：検討の余地を残して欲しいということで、今だと、主要人口から言ったら中国がトップ。英語ではない。英語はスタンダードだが、このままでいいのか。このまま出すと高校側としてはインパクトがありすぎると思った。

宮本委員：うちの高校でも第二外国語はやっている。結構そういう学校はあると思う。選抜でどう使うかは別問題。試験で無くなっても抑えるということはないと思う。今の流れの中では、英語以外の言語に触れさせたいという学校は増えると思う。

吉田教授：私も多言語・多文化大賛成なので、是非入れてほしいと思う。いずれは検定試験を活用とあったが、仏検や独検は英語のように、検証ができておらず、英語と同じレベルでは扱えない。なんとかそういう作業をきちんとして、それぞれの言語についても改善してもらって、大学に検定の結果を活用するように促していく必要がある。

東島委員：試験としては共通語である英語で良いと思うが、英語以外の外国語

を学習してきた子供たちをエンカレッジするため、例えば、調査書に他言語の学習状況をいれていただけたらいいと思う。

以上